東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

Global Committee Report : In with COVID-19

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川原,拓也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173832

国際中等教育研究　第15号 p.183 ～ 187
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

グローバル委員会の取り組み

Global Committee Report – In with COVID-19

グローバル委員会　川原 拓也

１章　今年度の活動概要

１節　with コロナにおける研究開発事業

2021 年度もまた新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）の影響を大きく受けた 1 年となった。2019 年度で 5 年間にわたるスーパーグローバルハイスクール（以下 SGH）研究開発事業は終了し、2020 年度からはこれまでの実績を基盤としながら学校として一部の事業を継続するとともに、新たな事業の展開も視野に入れながら活動を行っている。昨年度はコロナの感染拡大により、国内外の交流や研修活動が中止あるいはオンラインによる実施へと変わり、これまでの考え方とは大きくシフトチェンジする形での研究開発事業となった。オンラインによる交流や研修活動は、時間や場所を超えて様々な人とのつながりを持つことができる等利便性が高い一方、対面とは違いその場の空気感や熱量を感じることが難しく、リアルとは違ったテンポでのコミュニケーションは十分な相互理解に至らないケースもある。そのため、生徒が期待していた交流や研修活動とは少なからずギャップがあるという課題も浮き彫りになった。そのため、今年度は with コロナにおける研究開発事業をいかに生徒の期待に応え、実りのあるものにしていくのかということを念頭に置き、活動に取り組んだ。

２節　2021 年度の活動

2021 年度の活動は以下の通りである。

・ISS チャレンジ グローバル部門の開催（SSH 事業と連動。サイエンス部門は SSH 事業の一環として実施）
・ISS チャレンジ グローバル部門外部評価会（年 2 回。オンライン）
・課題研究成果発表会等への参加
　北陸新幹線サミット（長野県上田高等学校主催）（オンライン）
　高校生国際 ESD シンポジウム（オンライン）
　全国高校生フォーラム（オンライン）
　探究甲子園（オンライン）

東京学芸大学主催 SSH/WWL 合同課題研究成果発表会実施（オンライン）（運営幹事は今年度附属高等学校）

本校 2021 年度授業研究会での課題研究中間発表（オンライン）

・海外交流の実施
　UCL Japan Youth Challenge への参加（オンライン）
・課題研究活動支援
　グローバル・カフェ（対面、オンライン。年 3 回）
　グローバル・カフェ・スチューデント（対面）

できる限り対面での実施を検討し、オンラインの場合も同時双方型での実施とした。昨年度の振り返りをふまえ、対面及びオンライン両方の実施案を準備し進めてきたが、今年度も感染状況によってオンラインにせざるを得ない状況も多くあった。教員や生徒が zoom などのオンライン環境に慣れてきたこともあり、チャットなどの機能も同時に活用することで、オンラインによるデメリットは以前よりも減少していると感じる。しかしながら、数少ない対面での活動における生徒の様子を見ると、やはり空気感や熱量を感じながら対話できることのメリットの大きさをあらためて感じ、その重要性や必要性を強く感じることとなった。時間や場所を超えて手軽に交流ができるオンラインの活用は今後も継続されるべきではあるが、すべてがオンラインで代替されるものではないということを理解した上で、年間を通してのバランスを考えていく必要がある。

2章　ISS チャレンジの継続とその意義

第 1 節　2021 年度の実施概要とエントリー数

SGH 指定終了後も生徒の課題研究コンペティション「ISS チャレンジ」は本委員会の軸となる活動と捉え、継続している。生徒の課題研究への動機づけを目的として開始されたが、後期生（高校生）のみならず前期生（中学生）段階から積極的な参加が見られ、今年度エントリーした全 48 本中、前期生は 25 本にも上る。普段の授業や日常生活から研究課題を設定し、研究活動が学びのつながりを深めていることを感じ取れる内容も多く見られるようになった。また、後期生の研究の中には昨年度からの継続研究も複数見られる。「グローバル部門」「サイエンス部門」からなる ISS チャレンジも、オンラインを併用する等 with コロナの対応を余儀なくされたものの、オリエンテーション動画を ISS チャレンジに参加した経験者が作成し、上級生から下級生にその意義や魅力が伝えられる機会となった。今年度も編入生もエントリーできるよう、9 月にも第 2 次エントリーを受け付けた。

今年度の実施概要は以下の通りである。

2021.06.02	第 1 次エントリー　研究計画書提出
2021.06.07	研究代表者ミーティング①
2021.07.16	研究代表者ミーティング②
2021.07.17	第 1 回外部評価会（オンライン）
2021.09.10	研究代表者ミーティング③
2021.10.01	第 2 次エントリー　研究計画書提出
2021.10.06	第 1 次エントリー研究経過報告書提出
2021.11.06	第 2 回外部評価会（オンライン）
2021.11.29	研究代表者ミーティング④
2022.01.12	研究論文提出
2022.01.28	研究論文査読締め切り（教員）

グローバル部門にエントリーがあった全 48 本の研究テーマ一覧を次表に掲げておく。

	No.	年	研究テーマ
1次	**01**	1	日本人の睡眠と生活の改善
	02	1	なぜ民族は存在するのか？民族の利益とその発展
	03	1	バスに乗り切れないことを減らすためにはどうしたらよいのだろうか
	04	1	保護犬の殺処分に関する研究
	05	2	ラムサール条約指定地における賢明な利用（ワイズユース）の課題　ー日本国内での実施状況の比較からー
	06	2	中高生向けのスマートフォン依存対策アプリケーションの開発について
	07	2	英語圏と中国圏の方が日本の生活に困らないためのパンフレットを作成
	08	2	日本の道徳の授業の向上～海外の学習をもとに日本をもっとグローバル化へ～
	09	2	ホームレスの方への自立を促す支援策の提案
	10	2	デザインから現代的課題を発信する
	11	2	なぜ女性専用者はあるのに男性専用者はないのか？
	12	2	中高生を主体としたプラスチックごみ問題の解決について考える
	13	2	コロナ禍における意識と行動の違い
	14	2	障がい者スポーツの子供に対する教育および、デフスポーツの開発
	15	2	中高生から始める選挙への意識改革
	16	2	言葉以外の意思疎通手段はあるのか？
	17	2	抜け出せない貧困の連鎖を断ち切るために，日本で貧しい家庭の子供たちも十分な教育を受けれるような環境を作るにはどうすればいいのか？
	18	2	日本の難民受け入れに対しての提案
	19	2	学校内での生徒のLGBTQ＋への意識向上は可能か。
	20	2	どのようにして食肉に代わる食料を食生活に取り入れればよいだろうか？
	21	3	中学校の授業はどの程度デジタル化すべきなのか？
	22	3	日本の子宮頸癌ワクチン接種の現状
	23	3	ヘルプマークの普及と利用者が安心できるヘルプマークのアイデアの作成
	24	3	オンラインでの学習支援による子供の教育格差の解決
	25	4	メディアによる差別に関する研究
	26	4	Teen awareness and innovation for dating violence pervention
	27	4	グローバル食品表示アプリ「Globel」の開発・リリース・改善
	28	4	主権者教育を通して若者の選挙に対する意識に変化をもたらす
	29	5	エシカル消費の形骸化から脱却するために求められる消費者像
	30	5	地域食材を活用した商品のブランド化における重要な要素の考察
	31	5	なぜ練馬区でサイクリング観光は普及しないのか？
	32	5	プラスチック製品の代用商品の開発
	33	5	間食をとることによる作業効率の変化
	34	5	日本の共生社会を目指したオンラインコミュニケーションプラットフォームの実現
	35	5	Cultural Understanding in Penpal
	36	5	ジェンダーステレオタイプに考慮したヒーローモデルの提案
	37	5	女性医師のワークライフバランスを阻害する要因とその解決手段
	38	5	トキ消費における新たな流行形成プロセスの解明とその応用
	39	5	医療現場におけるアニマルセラピーの需要と普及率
	40	5	認知症予防に有効なボードゲーム
	41	5	日本の伝統工芸品の環境対策としての新たな価値を広める方法
	42	6	小学生の自己表現力向上を図る教育法の開発～心理学的アプローチを用いて～
	43	6	TGUISS生のインターネット依存とその対策　-デジタル社会への理解を深めたデジタルネイティブたちの声をヒントに-
	44	6	世界各国の新型コロナウイルス報道から見る世界のジャーナリズム
	45	6	人が人を裁くという権利は誰によって与えられたのか～AI裁判から学ぶ人間裁判の意義～
	46	4	高レベル放射性廃棄物 最終処分場問題の認知度向上に向けて ～問題を身近に感じ問題意識を持ってもらうためには～
	47	1	ストレスを与えない生き方をするには
2次	**48**	5	生徒が考える小学校におけるセクシャルマイノリティ教育

表１　2021 年度 ISS チャレンジ　グローバル部門　エントリー一覧（途中リタイアを含む）

第 2 節　コロナ禍における ISS チャレンジについて―自己評価シートから

コロナ禍における ISS チャレンジおいて、研究活動を通して生徒が自身の変化や成長をどうとらえているのか、またどのような課題が残ったのか彼らの声からみておきたい。

研究 No.3
初めは、バス事業者側だけが工夫すれば解決できると考えていたが、研究を進めていくうちに、利用者も改善できることがあると考えた。リスクを軽減するためには、バス事業者と利用者のどちらかが努力するのではなく、両方の視点から改善策を考えることが必要だというように考えが深まった。

研究 No.12
ある特定の企業や団体、自治体などがプラスチックごみ問題の解決に向けて様々な取組を行うことのみでは不十分であり、消費者、市民、学生、労働者など様々な立場から１人１人がプラスチックごみ問題に向けた取組を実行することが必要不可欠だと考えた。（中略）プラスチックごみ問題の解決策を実行する際には、たとえ実行する解決策がプラスチックごみ問題の解決に貢献する場合でも、解決策を実行する者自身の生活をわずかに不便にしてしまう可能性や、経済的な負担を増してしまう可能性、以前の人々とのつながりが絶たれてしまう可能性など、それまで継続してきた安定的な生活を変化させることが必要な場合も考えられ、これにはリスクが伴うと考えられる。このことから、プラスチックごみ問題の解決策を考案、普及させる際には、解決策を実行する者へのリスクも十分に考える必要があると考える。

研究 No.21
ICT 機器を教育に安直に導入するのは、リスクであるだけではなく、むしろ視力低下などの有害な要素のみを授業に投入するということに繋がりかねない。ここから、研究の本質は ICT 機器導入というリスクを大きく超えるリターンを示すことにあり、ICT 機器の可能性を探ることこそが、研究目的の達成に必要であると見出すことができた。

研究 No.26
Pandora’s Project からアドバイスをもらったときはアイディアに対して肯定的だったが、運営に関して多数の問題を指摘した。一方で、学生はアイディアに対して疑問を持っていたが運営方法に関してはコメントがなかった。このように、中高生におけるデート DV 防止策の提案という大きな課題に対して、団体と学生の間には考案に対する意見の違いがあることが考察できた。よって効果的なデート DV 防止策を考える上で、実際に学生が携わりアドバイスを得る必要があると考えられる。

研究 No.29
研究を通じて、エシカル消費は、社会貢献としての側面が誇張され、消費者としての責任が蔑ろにされ、語られているということを分析できた。他方で、企業へのインタビュー調査では、エシカル消費を商品の購買意欲促進のために用いられているが、それを企業が肯定的に捉えていることを知った。これは、研究の葛藤を生じさせた。エシカル消費を企業成長のために利用することは、ある種資本主義社会の中で社会的責任であるということは理解したものの、現状の状態が続けば、やはり本質的なエシカル消費に繋がりにくいのではないかと考えた。

生徒の自己評価から分かることは、第三者から評価・フィードバックをもらうことで自身の研究を客観的かつ多角的に捉えなおすことができ、深まりが見られるということである。コロナ禍において、外部とのつながりがやや薄れている中で、いかに生徒が取り組んでいる研究を多くの人の目に見える形で発表し、様々な意見をもらう機会を提供していくかが委員会の果たすべき役割として重要である。昨年度から続くコロナの影響を受け、全体として内向きになりつつある現状を、逆にオンラインで時間をかけずとも多くの人に見てもらえるという環境を活用し、外部とのつながりを絶やさないことが重要である。

３章　次年度以降の課題

2022 年度以降の課題としては以下の点が挙げられる。

1）生徒の国内外の研修や交流、外部発表の機会の確保（対面、オンライン問わず）
2）先輩から後輩への知見の共有・伝承
3）ISS チャレンジの指導体制の充実
4）教員の研究指導力の向上（評価の充実）

1）2）については、コロナ禍において全体的にやや停滞感の感じられる研究活動をあらためて活性化させていくためにも、機会の確保ともにこれまで 1 回生から積み上げてきたものを先輩から後輩へ引き継いでいける環境整備も必要である。同時に教員の働きかけによって生徒自身を励まし、背中を押し、委員会が提供する研究開発事業に積極的に参加できるようにしていくべきである。

また、4）については昨年度からの継続ではあるが、今年度研究部が中心となって、サイエンス部門・グローバル部門ともに評価のモデリングを行った。ISS チャレンジの評価規準を含め、単に論文の良し悪しを評価するだけにとどまらず、生徒の研究がよりよいものになるための教育的な側面を含む評価になるよう、今後も継続的に検証していく必要がある。

Global Committee Report – In with COVID-19

Abstract

In the corona pandemic that will start in 2020, there is no denying that our school's research activities have become somewhat stagnant. While various exchanges and trainings are switching to online, the importance and necessity of opportunities to feel the atmosphere and enthusiasm in person is increasing. In order to provide an adequate support system for students who are trying to enhance their research activities in this environment, the role of committees and individual teachers is becoming more important than ever. In the Corona pandemic as well, we need to keep up our connections with the outside world, utilize the knowledge we have accumulated so far, and move forward with our research activities.